

---

Act:Reverse

# 創造者な俺の異世界記録

利瀬 時夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Act: Reverse

創造者な俺の異世界記録

### 【Nコード】

N9094Y

### 【作者名】

利瀬 時夜

### 【あらすじ】

異世界？フィアデルフィア？に召喚された瀧沢志紀は、元居た世界に戻る為に世界改変を頼まれた。と言うのも今は昔。帰れない。それが分かった瞬間、彼の長い旅は幕を閉じた。半ば自暴自棄になりつつ彼は自分の都合の良い居場所を作る為に領土会得を決意する。そして現在、？黒獅白鷲戦争？で駆り出された彼はその戦争にて名を馳せ、領土を会得。侯爵としての地位を得た彼はシャンカティア半島に屋敷の設立を決意した。彼の力は神の力。戦争では鬼神の如く戦い抜き、彼に付いた称号は『黒獅子』。そんなある時、再

び神より連絡が入る『世界を完全改変して欲しい』と　（主人  
公最強系物語です。生々しい性描写や残酷な描写が含まれます。苦  
手な方は即座にバックブラウザ。不定期更新。そしてこの作品は『  
死ねない俺』の物語の世界の並行世界で展開されます故、すれ違  
うかもしれませんね。それではどうぞ

## 第零幕 Worst Fantasy（前書き）

さて、今回もやってまいりましたよ、主人公最強物語。  
今回の主人公は色々と最強です、はい。

それではどうぞ

因みに今回のサブタイトルの意味は『最悪な夢』ですね。  
では

## 第零幕 Worst Fantasy

噎せ返る様な血の臭いが鼻孔を突いた。

身を焦がす程の灼熱の熱波が、濛濛と立ち上がる黒煙を巻き上げ、天へと滅する。

先程まで藍色で、感嘆する程美しかった夜空が一瞬にして、黒と紅蓮に支配される。

「クツ……あ、はははっ、……あ、ハハハハハハハハハ……、くっ……、はは、はははははハハハハハッ！！」

その場を支配するのは、色だけでは無い。

臭いも勿論の事ながら、その狂喜染みた嗤い声もまた、その醜惡な空間を支配した。

左腕は既に肩から下が失われ、頬にもまた痛々しい程の斬り傷が刻まれ、嗤う度、その腕の傷跡と頬から鮮血が零れ伝い落ちる。

落ちた先には、柔らかな、それこそ血の気を失った青白い人の肌があつた。

腕の中で、彼女は眠った。

抱かれる様にして、眠る様に、それこそ眠りの森の美女とでも言う様に、眠る様に逝った。

血は彼女へと零れる度に、その白い肌を伝い、纏っている衣類へと流れ、紅色に染め上げる。

嗤うだけ嗤った後、少年の狂乱の嗤いは止まった。

ぐらっ、と瞬間、世界が揺れた。嗤っていた時とは違い、意識が切り離され様としているのか、膝が笑い、腰が竦み、全身が悲鳴を上げる。

「…………あ…………」

少年はそのまま重力に身を任せ、彼女を抱いたまま地面に倒れ伏せた。

それこそ、彼女を庇う様に、己の背から。

「…………、あ、ぐ…………、ッ…………、は、あ…………」

肩が揺れる度に、胸が競り上がり、口から息が吐かれる。

吐く度に香る血の香りは、鼻を塞ぎたくなるほどの物。

倒れた衝撃で腕から更に、おびただ夥しい量の命を司る心の臓へと送り届けられるハズの泉の液体が流れ出ていく。

身に纏っている、最高の職人による最高質の黒いコートも途切れ、破れ、千切れ　ボロ雑巾の様になっている。

中に着込んでいるシャツもまた、繊維が細かく、雑魚からの攻撃なら防御出来るのだが、今回ばかりは無理だった。右胸、左脇腹に銃創があり、其処から液体が零れ出ている。

致死的傷の量、死ぬとすれば死因は多量出血。

闇夜の空の如く黒い長い、肩くらいまである髪も紅と灰に汚れ、幼さを残すその顔もまた血化粧ちげしやうが成されている。

嗚呼　俺、死ぬんだな。

其処で少年は自覚する。

此処での約一年半の人生、楽しくもあり、悲しくも有った。

後悔は　あった。

後悔しているからこそ、言葉が浮かばない。

後悔しているからこそ、嗤ってしまふ。

嗚呼　護れなかった。

それが一番の後悔。

必ず護ると言ったのに、将来結婚しよう、約束したのに、護れなかった。

「嗚呼、……ああああ……」

オマエジヤダレモマモレナイ。

剎那、その言葉が脳裏を横切った。  
全身が痙攣する。

オマエハヤクソクモマモレナイ。

声が震える。

背筋に悪寒が走る。

オマエハ  
ムノウダ。

「アアアアア　嗚呼あああああ　あああ　あああ　あああ　あああ　あああ　あああ  
あああああああッッッ！！！！！」

獸の如き絶叫。

阿鼻叫喚の如き狂つた叫び声が木霊する。

空は何も答えてはくれない。

彼女は何も答えてはくれない。

「少年、じゃあ僕が救って上げるよ」

誰かが答えてくれた。

分からない。  
顔が見えない。

「僕の名前は でね、君を救って上げる為に此処に来たんだ」

誰だ。

怖い。

救う。

大丈夫。

「あーあ、こんなにやられちゃったんだ。でも大丈夫、君はまだ生きられる。

僕が君に能力を上げるよ。そして一つの宝具もね」

「あ、ああ……、宝、具……、能、……力……ッ、……あ？」

「そうだよ、君の能力は今見た所『エアスベア・イゲジライト時空転移』だけみたいだからね。宝具も『サウンスライズ・エラキライザー千器流星』。武器具現化だけが、良くこれだけで頑張ったね」

「何故、……ッ、それ、を……？」

「だって僕は だもん、当たり前さ。で、僕が上げる能力は一つ、それはね」

其処で意識は途切れた。

暗い、暗い闇の中に……。



「……」

目を覚ますと、何時も通りの屋敷だった。

時間はまだ5時45分。

まだ彼女達も起きて来ない時間だ。

「……、夢、にしちゃあ……、悪趣味過ぎるぜ……」

俺は再び寝転び、天井を見上げる。

ウエザスター・オブサーヴァー  
確か今日は快晴と？天統観測師？が言っていた。

そりゃあ、洗濯物日和だ。

改めて、俺はそう思った。

## 第一幕 新たなる情報（前書き）

さてさて、第一幕。

今回は主人公最強だが肉体スペックは弱い設定故に、読者様がいらだつ場合がございます。その場合は愚痴や指摘をドンドン感想に書き込んで下さい。

勿論、応援もお待ちしております。

それではどうぞ！

## 第一幕 新たなる情報

天翔馬の月、朝9時45分33秒。

日本なら季節は曆上冬。

やはりこの世界は日本がベースになっているのだろうか？

「これで三度目の冬になるけど……、慣れないもんだなあ」

私室の机に向かい、書類を見ながら俺は呟いた。

窓の外は煌々と太陽が輝いては居る物の、空っ風がヒューヒューと吹いているのが分かる。

この世界に来て丁度三年目、最初の頃の俺は脆弱克貧弱だった。

恐怖で足が竦んで、動けない時もあった。

護れなくて、泣いた時もあった。

しかし、今なら竦む事もないし、護り切るつもりだ。

大事な物を、大切な人達は必ず護る　もう二度と、壊れたくは無  
いから。

一休憩として書類の束を机に置けば、椅子を傾け、体を伸ばした。背骨がミシミシと言う音を立てて伸びて行く感覚が手に取るように理解出来た。

「朝から働きつ放しだからなあ……、疲れる疲れる」

椅子を傾けたままやれやれと肩を竦めて、俺は視線を机に戻した。まだ書類は山の様にある。何時終わるのだろうか。

いや、何時終わらせる事が出来るのだろうか？

「下手したら終わらんぞ……」

溜め息を吐いて、天井を仰ぐ。

すると、扉が二度、コンコン、とノックされた。

この規則的で、乱れの無い、間の無いキチンとしたノックの音。  
「空いてるぞ」

「はい」

そしてこの声、ビンゴ。

「こんな時間にどうしたんだ？ エリイ」

エリシア「オルトライズ。エリイ、と言うのは俺によって名付けられた一種の渾名<sup>あだな</sup>だ。

淡い紫混じりの銀色の髪に、前髪で隠れて見えないが風や動きで揺れ踊る度に窺える紫色の瞳はまるでラピスラズリ。

子供、と言うのは可笑しいかもしれないが、瞳の奥底にて光るあの宝石の如き輝きは、何かに興味を示した時の子供の瞳なのだ。

何事も見透かす様な、それでいて純粹と言うか、無邪気と言うか……、まあ可愛いから良いけど。

俺とエリイの出会いとは約1年5ヶ月前。

長年一緒に居たと言うわけでは無いのだ。

元々彼女は、壊滅したイジオ村と言う村の村長の娘であったが、身売りに出され、下劣克下品な上半身豚人種に襲われつつあったので助けた結果がこれである。

奴隷解放もしたので無理に着いて来なくて良いと言ったのだが、

案外強情で、一緒に着いて行くの一点張りだった。

結論から言えば、俺は彼女と『<sup>コンフィヴ・ブラクテイ</sup>血盟契約』を結んだ。故にもう二度と離れる事は許されない関係である。

嫌で血盟は結ばないさ、当たり前だろうよ。惚れたから結んだままで。何か問題でも？

首を傾げる俺にエリイは頷いてから「お客様がいらっしゃいました」と続けた。

「客？ 誰だ、こんな朝早くに」

俺は椅子から腰を離して尋ねる。

「皇国の一般兵士達で御座います。用件があるようですが、如何致しますか？」

皇国……？ 何でまた……。

「いや、俺が出よう。用件と言うのなら情報か何かだろうからな」

しかし近頃応答が無いと思ったら情報収集でもしていたのかね、トリエニスタ皇国は。

「行くぞ、エリイ」

「はい」

白いシャツの上から黒い薄手のジャケットを纏えばネクタイを締め、私室の扉へと向かう。

やれやれ、皇国の一般兵士が……、てか何で一般兵士に來させたし。騎士団長とかが来いよな、こう言う場合は。

私室の扉を開け、駆け寄って来るエリイを見てから再び歩み始める。

長い赤絨毯の廊下を抜け、玄関ホールへと歩を進める。

「と、言うかエリイ。一つ聞いて良いか？」

歩みながら、後ろを続く彼女に投げ掛ける。

「はい、何で御座いますようか？」

「トリエニスタ皇国の奴等は何か言っていたか？」

「いえ、唯シキ「タキザワ侯爵殿に用件があるとだけの一点張りでした」

内容までは話せない他言無用の内容ね、了解したよ。

きつとトリエニスタ騎士団騎士団長なら話してただろうね、女性苦手だし。

成程。考えたな……。

玄関ホールに到着した俺達は、既にやって来ていた三人に手をヒラリと振って見せた。

「来客だつて？」

そう尋ねると、腰に手を当てている淡い緑色の髪をした碧眼の持ち主である妖精<sup>エルフ</sup>、ライル「アキュレート」。

長いのでアキと呼んでいるこの屋敷の総料理長を務める彼女が頷いて「そうだよ」と応じた。

頷いた時に揺れたエメラルドの如き碧眼がまた見惚れる程美しい。まあそれでいて果てしないツンデレでボーイッシュユク男気に満ち

溢れているって所に俺は惚れて、メイドとして雇ったんだけどね。

「皇国の一般兵士ってエリイから聞いたが？」

「そそ、まあ一般って言うより雑魚？」

ちよつと棘のある言い方をしたのは水色の髪をサイドテールで結い、深いアクアマリンの如き輝きを秘めているリナリー「エヴァリオン」。

まあリナと呼ぶ、この屋敷随一の根っからの研究者克一種の天才。ツンデレとかヤンデレとか言う属性を持たない珍しい子でもある。

その研究熱心な所と、公明快活な部分と、人当たりの良さそうな性格。そしてその頭の良さも買って俺はメイドとして雇った。

「雑魚、ねえ。でも見た目で判断しちゃ駄目なんじゃないかにやあ？」

語尾が色々可笑しいが、これが彼女。銀色では無い、灰色混じりの藍色の髪に、闇夜に近い藍色の双眸を持つ、それこそサファイアの如き煌きを持つ瞳を持つヒエナ「イーゲルアジャンスタ」。

長過ぎるよね、って思い俺は彼女の名前を少々弄りヒナと銘々したのだが、これが案外あっていた。可愛いしね。アニシア

彼女はこのメイド達の中でも珍しい獣人で、猫科。故にマタタビ禁止令が我が屋敷では発足されている。

可愛さは前提に、その猫の如き俊敏さと行動力、天才的召喚魔法センスを買って雇ったわけでは無いが、メイドにした。

「成程成程、皆の意見は良く分かった。それじゃあ試しにお話聞いてみようかね」

俺は頷いてから扉に歩み寄り、開けた。

目の前に現れたのは、それこそ白い金属板の下地に金色の金属で刺繍された鎧を身に纏う兵士達の姿だった。

皆最低限の武装はしている様だが、それにしても武装が温い。ぬる

此処に来るには徒歩なら6時間、テレポ・ゲート？ 転移門？での移動なら瞬間的だが今は時間帯的に込む時間帯。

込めば時間は掛かる。ならやはり徒歩か？ そう思えるが、徒歩

ならば武装はもつと濃くても良い。それこそ狙撃銃や片刃曲剣シエルミータを持つていても可笑しいとは思わない。

「で、何の用かな、トリニエスタ皇国騎士団の皆さん」

相手を探る様にしつつ、表情には出さずにして尋ねる。

「シキータキザワ侯爵殿ですね。御待ちしておりました」

「嗚呼、うん、で、用件は？」

「ハッ、国王より新たな情報を得た。と言う事であり、これを届けに参った所存で御座います」

頭を下げ、俺に書類の入ったケースを渡して来る一人の兵士に俺は「内容は？」と尋ねた。

「帝国の始動次期と、武装種類。

そして今年も新たに召喚される事となる勇者についての事で御座います」

「……分かった、国王には？内容が分かり次第使いを送る？と言って置いてくれ」

頷く俺に兵士達は右手を左胸にガシャンと当てて敬礼してから「了解であります」と叫んだ。

熱いねえ、まあ嫌いじゃあないけどね、こつ言つ熱さは。

去って行く兵士達に手を振りながら俺は書類を抱え、屋敷の中へと戻った。

さて……、それじゃあ目の前で待ち構えてる彼女達おれのおんなたちにでも説明し

ようかね。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9094y/>

---

Act:Reverse      創造者な俺の異世界記録

2011年11月27日08時52分発行